



伊保小だより

NO.17
令和2年7月29日
高砂市立伊保小学校

校訓 かしく・つよく・うつくしく

新一万円札の顔 『青天を衝け』 『論語と算盤』 渋沢 栄一

7月8日の「伊保小だより NO. 14」の「2020年 伝えたい言葉」で紹介した渋沢栄一さんは、江戸時代末期に農民（名主身分）から武士（幕臣）に取り立てられ、明治政府では、大蔵少輔事務取扱となり、大蔵大輔・井上馨の下で財政政策を行いました。退官後は実業家に転じ、第一国立銀行や理化学研究所、東京証券取引所といった多種多様な会社の設立・経営に関わり、二松學舎第3代舎長（現・二松学舎大学）を務めた他、商法講習所（現・一橋大学）、大倉商業学校（現・東京経済大学）の設立にも尽力し、それらの功績を元に「日本資本主義の父」と称されます。また、論語を通じた経営哲学でも広く知られています。ノーベル平和賞の候補にも2度選ばれています。令和6年（2024）より新紙幣一万円札の顔となります。また、令和3年（2021）に渋沢栄一を主人公としたNHK大河ドラマ『青天を衝（つ）け』が放送される予定です。（主演：吉沢亮さん）

大正5年（1916）に『論語と算盤』を著し、「道徳経済合一説」という理念を打ち出しました。幼少期に学んだ『論語』を拠り所に倫理と利益の両立を掲げ、経済を発展させ、利益を独占するのではなく、国全体を豊かにする為に、富は全体で共有するものとして社会に還元することを説くと同時に自身にも心がけました。『論語と算盤』にはその理念が端的に次のように述べられています。（この『論語と算盤』は、4、5月の臨時休業中の職員朝会で、教職員が日替わりで、心に残った本やお薦めの本、今読んでいる本などを紹介し合ったなかの1冊です。）

「富をなす根源は何かと言えば、仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ。」

事業の成立には、①国家社会に有益なこと、②担当者に人を得ること、③それ自体で儲かること～の三点をあげ、渋沢は「こんなに儲かります」という事業には決まって「国家社会に役立つか」と質し、「こんなに有意義です」という会社には「それだけではいけない。どれだけ儲かるか」と必ず念を押し、「論語」と「ソロバン」を一致させました。

その渋沢栄一さんが晩年好んで揮毫（きごう：筆をふるう意、書画をかくこと）したのが、次の言葉です。

「天意（てんい）、夕陽（せきよう）を重んじ 人間、晩晴（ばんせい）を貴（たつと）ぶ」

一日懸命に働き、沈まんとする夕日の美しさは格別です。人間も年とともに佳境に入り、晩年になるほど晴れ渡っていく人生を送るのが尊いこと。「夕陽が没するときに素晴らしい輝きを放つのは天の意志だ。それと同じように人間も輝かしい晩年を輝かしい社会貢献をもって締め括りたいものだ」ということを渋沢翁は言っておられたそうです。

人間は晩年が大事である。若い時に欠点があっても、晩年が良ければその人の価値は上がってくるものである。日中どんな快晴でも夕方に雨がふれば、その日の一日中雨がふっていたように感じられるのと同じで、人間も晩年が晴れやかなものでないと、つまらない人間になってしまうものだという意味でしょう。

夕日の美しさは格別です。一日を懸命に照らし続け、西の空を茜色に染めて沈んでいく夕日の美しさは感動的です。それは天が夕日のような生き方を重んじている現れに他なりません。人間もまた、若くして才あり、もてはやされながら、晩年は見る影もないといった早成の人生ではなく、年とともに佳境に入り、晩熟、晩晴していく夕日のような生き方が貴い、ということ、この言葉は 私たちに教えてくれています。

2020年 伝えたい言葉

自分に誠実でないものは、決して他人に誠実であり得ない。

夏目漱石『行人』より